

都市臨海部における 海辺まちづくり教育のあり方に関する研究 -東京都大田区臨海部を対象として-

首代 佑太¹・横内 憲久²・岡田 智秀³・関 奈穂⁴

¹学生非会員 日本大学大学院理工学研究科 不動産科学専攻 博士前期課程
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail: yut.shdi.817@gmail.com)

²正会員 工博 日本大学理工学部 建築学科
(〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14, E-mail: yokouchi@arch.cst.nihon-u.ac.jp)

³正会員 工博 日本大学理工学部 社会交通工学科
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail: okada@trpt.cst.nihon-u.ac.jp)

⁴非会員 株式会社ルミネ
(〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-2-2JR 東日本本社ビル, E-mail: cinnamoroll_nhy@yahoo.co.jp)

まちづくりの意義を子どもたちへ伝承する重要性から、各地で小中学生を対象としたまちづくり教育が進められている。しかし、この取り組みは一般的に校区単位で行われるため、普段見慣れている日常の空間や地域資源が看過されがちである。このため地元地区を他地域の児童にみてもらい、評価し合う「気付き」の学習が重要になると考えるが、そうした手法は確立されていないのが現状である。本研究では地元地区だけでなく、その地区と繋がりがあがる周辺地域も対象範囲とし、地元地区における見過ごされがちな地域資源の発見・再認識を狙った地区交流型まちづくりワークショップを展開した。この成果からストーリー性を踏まえたまちあるきルート構築や、児童間の交流による学習効果の重要性を捉えた。

Key Words : *Town Planning Education, Waterfront, Ota of Tokyo*

1. はじめに

近年ではまちづくりの意義を子どもたちへ伝承する重要性から、国の施策をはじめとして各地で小中学生を対象としたまちづくり教育が進められている¹⁾。しかしながら、この取り組みは一般的に普段見慣れている校区単位で行われるため、日常の空間・地域資源が見過ごされがちという問題がある。このため地元地区を他地域の児童にみてもらい、議論し評価し合う「気付き」の学習が重要になると考えるが、そうした手法は確立されていないのが現状である²⁾。

そこで本研究では校区単位にとどまらず、その地区との繋がりがあがる周辺地域(他の校区)も対象範囲とし、地元地区において見過ごされがちな地域資源の発見・再認識を狙った地区交流型まちづくりワークショップ(以下、地区交流WS)を実施し、この取り組みを通じて、小学校児童を対象としたまちづくり教育のあり方を導くことを目的とする。なお、本稿では取り組みの成果から児童の印象に残りやすいものの傾向とその要因から地区交流WSの効果と留意点を明らかにする。

2. 研究対象

対象地区は、東京初の海水浴場開設をはじめ、海苔産業や海岸料亭街の発展といった多くの海の文化が蓄積され³⁾、このような海の文化を地域学習の要素として取り扱うことは意義が大きいものと考え、東京都大田区臨海部とする(図—1)⁴⁾。この大田区臨海部における小学校の教育プログラムでは、海の文化の活用方策が見出されていないのが現状である⁵⁾。

そこで、本研究ではかつて漁師町として栄え、現在も漁業が行われており、海を間近に感じることのできる大田区羽田地区の羽田小学校(以下、「羽小」と)、海苔産業等の海の文化が蓄積されているが、埋め立てにより海から遠ざかった大田区大森地区の大森第五小学校(以下、「大五小」)の2校を対象に地区交流WSを展開する^{3) 6)}。この対象小学校の選定理由として、上述したようにそれぞれの地域的成り立ちは似ているものの、大森地区は埋め立てにより内陸化が進み、羽田地区は海が現存するという対比的関係にあるため、両地区の比較により「気付き」の学習が期待できると考えたためである。

3. 研究方法

3-1. WSの概要とプログラムの特徴

本研究では、「羽小」および「大五小」の第6学年それぞれ全67名と全63名の計130名を対象に表-1に示す手順でワークショップ(以下、WS)を展開する。本稿では、羽田小学校の取り組みに着目する。そのため、「羽小」が存在する羽田地区を「地元地区」、「大五小」が存在する大森地区を「相手方地区」と定める。この取り組みの流れとして、WSを以下の三段階で実施した。

- ①地区交流WSを進めるにあたっては、まず「羽小」児童が地元地区を認識する必要があると考え、「羽小」児童による地元羽田地区のまちあるきWSを実施する。(事前準備段階)
- ②「大五小」児童のガイドによって、相手方地区のまちあるきを実施し、その後相手方地区の印象を議論することで地元地区の特徴を認識する(相手方地区交流段階)。
- ③「羽小」児童のガイドによって地元羽田地区を「大五小」児童に紹介し、地元地区を評価してもらう(地元地区交流段階)以降ではこれらの各段階の特徴について述べていく。

3-2. 「羽小」児童が地元地区を認識する事前準備段階

地区交流WS開催に先立って「羽小」児童があらかじめ地元地区にどのような印象を持っているかを捉えるために、事前アンケート調査を行う。また、地区内の地域資源を学習するにあたっては、児童が地域資源を実際に現地で確認することが重要と考え、まちあるきを実施する。そして、その直後に校内で学習内容を共有するためのWSを行う。これらの学習効果を高めるために、4~6名単位で全12班の少人数グループを構成し、班ごとに学習内容を教示する大学生2名を配置する。大学生を活用した理由は、12の各班にまちあるきの際の安全確保が

必要となり、小学校サイドではそれだけの人員を確保できないことや、大学生に対し児童は親近感を抱きやすいと考えたためである。また、まちあるきルートの設定は、当地区に詳しい地元有識者へのヒアリングを兼ねた有識者ガイドによる現地踏査や文献調査を通じて、海やまちの拠点・骨格となる地点(全9地点)を抽出し、それらを結ぶ全長2.5kmの経路とした(図-2)。教示内容は児童にわかり易く印象付けるために、各地点の教示内容と関連のある写真や図を掲載した「オリジナル紙芝居」を用いた。

3-3. 相手方地区(大森地区)を認識する交流段階

地元地区の地域資源に対する認識を高める方法のひとつとして、地元地区の児童が相手方地区の地域資源を実際に現地で学習することで地元地区との異なる点や類似点を考えさせる「気付き」の学習が重要と考える。そこで相手方地区の大森地区のまちあるきを実施する。その際に「羽小」児童が大森地区の地域資源を正確に捉えられているかを把握するアンケート調査とともに、学習内容の共有と大森地区の印象を捉えるためのWSを行う。これらの学習効果を高めるために、この取り組みのグループ構成は、まちあるきでは5~6名単位(「羽小」児童2~3名、「大五小」児童2名、大学生1名)で全29班の少人数グループとした。またWSの際は、「羽小」児童のみで、6~8名単位(羽小児童4~6名、大学生2名)とし、前段階とほぼ同様のグループメンバーで全14班の少人数グループを構成した。大森地区のルートは、既往研究³⁾によって得られている海やまちの拠点・骨格となる地点(全10地点)とし、それらを結ぶ全長2.5kmの経路を設定した(図-3)。なお、各説明地点の教示内容は表-3に示す通りである。また、相手方地区の教示方法は「大五小」児童が「羽小」児童に教示した。そのため、「大五

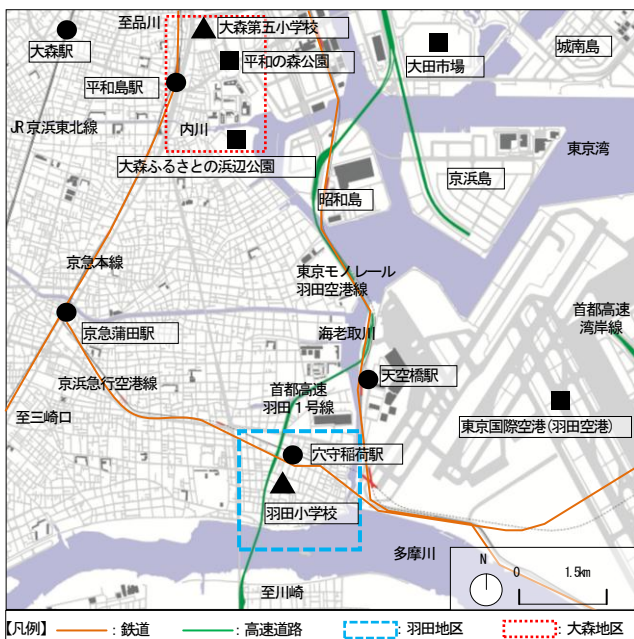


図-1 研究対象地区(東京都大田区臨海部周辺地区)

表-1 WS概要

WSの種類	日時	参加者	プログラム内容	工夫点	アンケート内容
第一回羽小まちあるきWS	2011年10月4日(火曜日) 10:40~15:00	羽小第6学年67人・教員3人・大学生26人	①事前アンケート ②大学生が児童に地域資源を説明しながらまちあるき ③事後アンケート ④WS形式で羽田地区の印象を共有 ⑤羽田地区のキャッチフレーズを決める	・個人の意見を言いやすくするため、4~6人の班に分ける ・親近感を持たせるため、大学生を班に含ませる ・教示方法は視覚的に印象づけることが可能な紙芝居形式とし、班ごとに大学生が伝える ・WSでは地元地区の将来像を導くため、そのキャッチフレーズを班ごとで決定する	事前アンケート：羽田地区の将来像 事後アンケート：まちあるきで回った羽田地区の地域資源の記憶確認
	2011年10月27日(木曜日) 09:00~15:00	羽小第6学年63人・大五小第6学年68人・教員5人・大学生27人	①大五小児童が羽小児童に大森地区を説明しながらまちあるき ②事後アンケート ③羽小児童はWS形式で大森地区の印象を共有	・個人の意見を言いやすくするため、4~6人の班に分ける ・親近感を持たせるため、大学生を班に含ませる ・教示方法は視覚的に印象づけることが可能な紙芝居形式とする	事後アンケート：まちあるきで回った大森地区の地域資源の記憶確認
第二回地区交流WS	2011年12月5日(火曜日) 08:45~12:15	羽小第6学年68人・教員3人・大学生7人	地区交流WSに向けて、児童が羽田地区を説明する事前リハーサル練習を大学生を相手にを行い、大学生は指導する	・本番直前に行うことで、児童の記憶に残りやすくする ・4~6人の班で行うことで、細かな指導を行う	
第三回地区交流WS	2011年12月9日(金曜日) 09:00~14:05	羽小第6学年68人・大五小第6学年65人・教員5人・大学生29人	①羽小児童が大五小児童に羽田地区を説明しながらまちあるき ②事後アンケート ③大五小児童はWS形式で羽田地区の印象を共有	・個人の意見を言いやすくするため、4~6人の班に分ける ・親近感を持たせるため、大学生を班に含ませる ・教示方法は視覚的に印象づけることが可能な紙芝居形式とする	事後アンケート：①大五小児童に言われて初めて気付いた羽田地区の良いところ ②羽田地区の将来像 ③WSの印象

小)児童は地区交流WSに先立って、大学生を相手に説明練習を行った。この教示内容は、羽田地区のまちあるきと同様に、児童にわかり易く印象付けるために「紙芝居形式」とするが、教示するシナリオは、「大五小」教諭の提案により、大学サイドで用意したシナリオに「大五小」児童が自分たちでまち調べを行った結果を含めた。

3-4. 地元地区(羽田地区)を紹介する交流段階

地元地区(羽田地区)のまちあるきでは、両校の児童に互いに馴染んでもらうためにも前節と同じグループ構成とし、「羽小」児童が「大五小」児童へ「紙芝居形式」で地域資源を教示する地区交流WSを行う。その後、相手方の「大五小」児童に指摘された羽田地区の印象や、本取り組みの印象を捉える為のアンケート調査を行う(表-4)。なお、大森地区での地区交流WSと同様に、地区交流WS直前に「羽小」児童も大学生を相手に説明練習を行っている。



写真-1 大学生による教示風景 写真-2 WS風景

4. 地元地区(羽田地区)の事前準備段階での成果

事前アンケート結果とWS成果を表-2に示す。地域資源を学習するためのまちあるき実施前の「事前アンケート」の結果および、まちあるき直後の「WS成果」(事後アンケート結果・キャッチフレーズ)について分析を行う。

a). 事前アンケート結果—本取り組み実施前の「羽小」児童の地元地区の印象を捉えるために行った事前アンケート(表-2)において、「望むまちの将来像」では、「広い遊び場があるまち」(23.8%)や「今のままのまち」(13.4%)、さらに「無回答」(19.4%)が多く、これらで過半数を占める結果となった。これより、児童は当地区の地域特性を具体的には認識していない様子が伺える。

b). WS成果—まちあるきの学習効果を確認するために行った事後アンケートにおいて、「質問1:正答率」に着目すると、「①映画館跡・劇場通り」「③レンガの護岸」「⑦五十間鼻無縁仏堂」「⑤羽田三丁目六丁目・七曲り」「④本羽田通り」が過半数と比較的高い正答率であった。さらに「質問2:好きな地点」に着目すると、「③レンガの護岸」「⑦五十間鼻無縁仏堂」をあげた児童が6割と最も多く、

表-2 地元地区(羽田地区)事前準備段階まちあるきの事前アンケート結果およびWS成果

意見内容	回答数	回答率	地域資源の教示内容	順位	回答人数(回答率)	好きな理由 ※0内は回答人数
	16人	24%				
広い遊び場があるまち	9人	14%	まちなかの祠を集めたよ・漁師が参りてきた・羽田地区と大森地区を繋ぐ道	6	11人(17%)	漁師が参りしたから(6)・魚を大森まで運ぶから(1)・わからないことが多かったから(1)・祠の存在を知ったから(1)・無記入(2)
今のままのまち	8人	12%	大正7年に作られ、昭和3年まで使われた。洪水から羽田地区を守っていた	1	39人(61%)	まちを守っていたから(24)・今も残っている(3)・海に近いか(3)・船が近くにあるから(2)・堤防だったのを知らなかった(1)・レンガが並んでいるから(1)・無記入(5)
お菓子屋やレストランなどお店が多いまち	6人	9%	江戸時代から道路の幅員が同じ。当時の祭りで夜店が出て賑わっていた	9	6人(9%)	道幅が変わってなくてすごい(3)・写真を見たから(1)・一度やってみたくらいから(1)・無記入(1)
海が綺麗なまち	3人	5%	床屋・風呂屋・蕎麦屋の3つ揃いが多く存在し、漁師がよく訪れた・神輿が七曲りから七曲り	3	25人(39%)	漁師がよく「床屋・風呂屋・蕎麦屋」に行ってきたから(15)・漁師と関係しているから(4)・無記入(6)
幸せな平和なまち	3人	5%	昔は貧しい人が暮らしていた・レンガの護岸より屋根が低かった	7	10人(16%)	昔貧しい人が住んでいたから(3)・海に近いか(1)・船着き場が近いか(1)・たまに水害があったから(1)・無記入(4)
賑やかなまち	2人	3%	多摩川に流れてきた震災や戦争の遺体を埋めている。多くの漁師が参拝される	1	39人(61%)	漁師が参拝しているから(16)・海に近いか(5)・海に繋がっているから(4)・漁師が参拝するから(3)・初めて知ったから(3)・無記入(8)
アイドルやキャラクターがいるまち	2人	3%	祭りの際には大漁旗を掲げ、ウラ通りは大正時代より主要道	4	16人(25%)	海が近いから(6)・海の上でお祭りを行っているから(3)・羽田空港に繋がるから(1)・釣りができるから(1)・無記入(5)
魚が食べられるまち	2人	3%	昔看板があった・看板の持ち主は広告収入のみで生活できた	5	12人(19%)	海が近いから(3)・羽田空港と関係しているから(2)・広告料で生活できたことに驚いたから(2)・今も鉄筋が残っているから(1)・漁師が見てほしいと思うから(1)・羽田を宣伝してほしいから(1)・無記入(2)
自然が豊かなまち	1人	1%				
ゴミがないまち	1人	1%				
ビルがいっぱいあるまち	1人	1%				
積みだまい海水浴ができるまち	1人	1%				
ダンスの場所が多いまち	1人	1%				
無回答	13人	19%				
合計	67人	100%				

「⑤羽田三丁目六丁目・七曲り」が4割と次いで多い。これらより、児童が正確に捉えつつ好ましいとした地域資源は、③⑤⑦の3地点であった。これらについて「好きな理由」をみると、「③レンガの護岸」は洪水から自分たちの生活空間を守っていたことや、「⑤羽田三丁目六丁目・七曲り」は、かつて漁師が漁の後に「床屋→風呂屋→蕎麦屋」の順を一揃えて連日訪れたなど、過去における身近な生活空間の安全や楽しみといった物語性が、児童の印象を高めたと考えられる。また「⑦五十間鼻無縁仏堂」は、海にせり出た祠であり、水死体を祀っているといった、海への畏怖の念が印象を高めていた。一方で正答率が9割と最も高い「①映画館跡・劇場通り」は、「好きな地点」と回答した児童はわずか1割足らずであった。これは、かつて娯楽施設という日常生活の楽しみが印象を深めたと思われるが、教示内容が単に「存在していた」という情報にとどまったことが好ましい評価に至らなかったと考えられる。

最後にWSのまとめとして班別で決めた羽田地区のキャッチフレーズは、12班中10班が海に関するものをあげ、6班が「漁師」や「歴史」に関するキーワードを含めたものをあげた。事前アンケートでは「歴史」や「漁師」といったキーワードをあげた児童がいなかったことから、羽田地区の地域特性を認識していなかった児童がまちあるきやWSを経て、羽田地区の地域特性を認知しはじめていると考えられる。

5. 相手方地区(大森地区)を認識する交流段階の成果

大森地区の地域資源を学習するためのまちあるき実施後の「事後アンケート」の結果および、その後行ったWSの「WS成果」を表-3に示し、これについて分析を行う。

a). 事後アンケート結果—大森地区のまちあるきにおける学習効果を捉えるために、「羽小」児童を対象に行った事後アンケートの「質問1:正答率」に着目すると「①大森マスタープレイス」(89%)「②スポーツセンター」(86%)「⑤漁師おもかげ通り」(70%)「⑨大森第五小学校の裏」(76%)の正答率は7割以上であり、「羽小」児童はこれらの地点を正確に記憶した。これらの地点において前節同様に、「①大森マスタープレイス」「⑨大森第五小学校の裏」では、東京初の海水浴場といったことや、「大五小」の目の前は海だったという驚きや、「②スポーツセンター」ではかつての魚市場のにおいとといった生活空間に関わる物語性によって、「羽小」児童の記憶に残りやすい傾向にあった。また、「⑤漁師おもかげ通り」においては、海が遠ざかった現在でもゴカイやシジミを販売するなどの漁師の暮らしぶりが現在でも目に見えることや、羽田地区での教示内容において漁師というキーワードが多く存在していたことから、地元地区の地域特性と類似する点によって「羽小」児童の記憶に残りやすかったと考える。

一方で、「⑥内川」(27%)「⑦大森ふるさとの浜辺公園」(38%)「⑧海苔ふるさと館」(37%)での正答率は4割以下であった。これは、「⑥内川」「⑦大森ふるさとの浜辺公園」は

表-3 相手方地区(大森地区)地区交流まちあるきの事後アンケート結果およびWS成果

地点名	質問1:どのようは場所だったか(有効回答63人)		
	地域資源の教示内容	順位	正解人数(正答率)
①大森マスタープレイス	東京で初めての海水浴場があった・東京オリンピックの時に海が埋め立てられた	1	56人(89%)
②スポーツセンター	大森魚市場だった・水揚げされていた・魚のにおいがした	2	54人(86%)
③川島海苔店	ボートの買出しをしていて・音から存在している	6	40人(63%)
④三井のリパーク	海の水を使った銭湯があった	7	39人(62%)
⑤漁師おもかげ通り	漁師の人が今も住んでいる家が存在・大森でとれた「シジミ」や「ゴカイ」などを売っている	4	44人(70%)
⑥内川	漁師の船が停泊・漁業が盛んで今も釣りをしている人もいる	10	17人(27%)
⑦大森ふるさとの浜辺公園	かつての大森海岸を襲われるために造られた・人工の砂浜公園	8	24人(38%)
⑧海苔ふるさと館	徳川家も認めた海苔が作られていた・大森の海苔はヨーロッパの博覧会にも出展された	9	23人(37%)
⑨大森第五小学校の裏	学校の目の前に海・護岸がある	3	48人(76%)
⑩ピンク広場	海苔干場だった・手伝いに来ていた子供達の遊び場	5	42人(67%)

分類	班数(全14班)	意見内容全211件※0内の数字は班であがった意見数	
		意見内容	班数
海	14班	大森の海がきれい(15)・海が近くにある(12)・漁師がいる(8)・大森の海は汚い(5)・海にゴミがある(4)・釣りができる(2)・海が共通点(1)・砂浜がきれい(1)・内川と多摩川が似ている(1)・海が埋め立てられてしまった(1)・海が広い(1)・大森は海で遊べて、羽田は遊べない(1)・海まで遠い(1)・大森は海に関するものが多い(1)	【計54件】
遊び場	13班	遊び場が羽田より多い(13)・公園が広い(4)・公園が少ない(3)・大森ふるさとの浜辺公園がきれいだった(2)・公園の種類が羽田と違う(1)・公園に自然が多い(1)・遊び道具があれば良かった(1)	【計25件】
街並み	11班	細い路地は大森より羽田のほうが多い(13)・羽田より高い建物が多い(7)・大森はマンションが多く、羽田は一軒家が多い(6)・神社は羽田のほうが多い(1)・古い建物が多い(1)・建物が多い(1)	【計29件】
施設	11班	海水湯がいい(5)・古いお店が多い(4)・海に関する商店街がある(3)・銭湯が少ない(2)・神社が多い(2)・銭湯が多い(1)・体験できる施設があるのいい(1)・お店が多い(1)・海水湯は微妙(1)	【計20件】
自然	9班	自然がすごく素敵だった(7)	【計17件】
学校	9班	学校のすぐ近くに海があったことがすごい(6)・学校が海から遠い(4)・護岸が気持ちにくい(3)・護岸が羽田と一緒(1)・羽田の護岸のほうが高い(1)・校庭が砂だった(1)	【計16件】
海苔	9班	海苔が有名だった(4)・大森は海苔屋が多い(3)・海苔がおいしい(3)・羽田も海苔を作っていた(1)・海苔干場で子供たちが海苔を食べていたことが面白い(1)・海苔に関するものが多い(1)	【計13件】
生物	4班	羽田も大森と同じで魚、貝が釣れる(1)・貝が多かった(1)・サリガニがいた(1)・魚が死んでいた(1)	【計4件】
住むなら羽田	2班	大森と羽田では羽田に住みたい(8)	【計8件】
その他	14班	昔っぽいところが良かった、懐かしいイメージがあった(1)・羽田のほうが人の関わりが深い(1)・羽田よりもいいにおいがする(1)・おもかげ通りでは意味の歴史が感じられた(1)・大通りがあったと楽しそうだった(1)・埋め立てられたところがたくさんある(1)・祭りの歴史は羽田の方が長い(1)・昔に関する場所が多かった(1)・大森はきれいだった(1)・今でも昔の面影がたくさんあった(1)・町にごみ落ちていた(1)・マスタープレイスがきれいだった(1)・漁師おもかげ通りがもったきれいだっただけよかった(1)・もって回ってみたい(1)・広いところがいい(1)・おもかげ通りの貝等を食べてみたい(1)・昔はボートが借りられるのが楽しい(1)・昔は井戸があっただけよかった(1)・都会的だった(1)・埋め立てでなくなってしまうことが印象的(1)・飛行機の音がしない(1)・しじみが好き(1)・おもかげ通りはショートカットが出来る(1)・ピンク広場という名前なのにピンクのものがなかった(1)・大五小の人たちと歩いて面白かった(1)	【計25件】



図-3 大森地区まちあるきルートマップ

【注】事後アンケート欄の「空欄率」は、有効回答数64人に対し当該地点に関する回答が見られなかった人数の割合

漁船の係留場所であることや、かつての大森海岸をよみがえらせた海浜公園といった、説明要素が目の前に現存することから一見すると「羽小」児童の記憶に残りやすいものとする。しかし、まちあるきの際は停泊している漁船が少なかったことや、かつての大森海岸の姿を想起する情報がなかったことなど、「羽小」児童自らが実感できなかったため正しく記憶されにくかったと考える。また、「⑧海苔ふるさと館」においては、教示内容が「海苔を江戸時代の徳川家へ納入」や、「ヨーロッパの博覧会への出展」といった歴史の記述のみであったことから、「羽小」児童には身近な生活とは関連が希薄な教示内容であったため理解しきれなかった結果になったと考える。

この大森地区のまちあるき後のアンケートでは、正答率7割を超えた地点が4地点であり、前節の羽田地区での取り組みでは、2地点であった。このように全体的に羽田地区で行った時よりも「正答率」が高いものが多くなったのは、「大五小」児童が当プログラムに取り組み始めて2年目という経験年数が教示方法に大きく効果としてあらわれたことによるものとする。

b). **WS成果**—相手方の大森地区の学習内容を共有するために、「羽小」児童がグループごとに行ったWS成果を示した表—3をみると、「海」に関するものは14班全てであげられ、「遊び場」に関するものは14班中13班、「街並み」「施設」に関するものは14班中11班であげられていることがわかる。このうち、「海」については大森の海はきれい、海が近くにあるといったもので過半数を占めた。前者は、小学生にありがちな海がきれいといった環境面での評価によるものである。一方で、海へ近接していることに対して評価している班が多数みられた。これは、羽田地区では船舶利用者のみが利用できる桟橋や直立護岸などが存在し、海に近接しながらも海に近づくことが出来ないこと、これに対し大森地区では、「⑦大森ふるさとの浜辺公園」のように砂浜と緑地帯で構成される一般市民に開放された場があったことなどに起因していると考えられる。また、「遊び場」では遊び場が羽田より多い、公園が広いといった意見があげられた。これは羽田地区は、漁師町としての街並みが残り密集した住宅地であるため、公園用地を確保できないことに対して、大森地区ではまちあるきルート内に存在する平和の森公



写真-3 地区交流WSでの児童によるまちあるき風景(羽田地区)

園という広大な公園の存在によって多くの班であげられたものとする。一方、「街並み」では細い路地は羽田の方が多く、羽田より高い建物が多いといった意見があげられた。これは、羽田地区の地域特性である低層戸建住宅の密集や、それにより生ずる細い路地空間との対比によって印象に残ったものとする。他方、「施設」ではかつて大森地区に存在していた海水湯が好ましい、現存する古いお店が良いといった意見があげられた。これは羽田地区には漁師がよく利用していた銭湯があったことや、古い商店の存在などの大森地区と羽田地区の共通性が見出された結果とする。

6. 地元地区(羽田地区)を紹介する交流段階

前章で述べた、相手方地区(大森地区)のまちあるき実施後は、「羽小」児童の説明のもと、「大五小」児童に地元地区(羽田地区)の魅力を認識し評価してもらう地元地区のまちあるきを行った。その直後に「羽小」児童を対象として、「大五小」児童に評価された地元地区の地域資源や、取り組みを通じての「羽小」児童の意識の変容を捉えるためのアンケート調査を実施した。この結果を表—4に示し、以降ではこれに基づき考察を行う。

a). **「大五小」児童からの評価**—「質問1:「大五小」児童に言われて改めて気づいた羽田のいいところ」に着目すると、「レンガの護岸」に関する意見が最も多くあげられた。これは前項の事前準備段階のWSでも多くあげられた意見である。しかし、「大五小」児童に改めて指摘され、「レンガの護岸」を地元地区の重要な資源として再認識し、その存在を誇りに思う機会になったといえる。

表-4 地元地区(羽田地区)地区交流WS成果

質問1:大五小児童に言われて改めて気づいた羽田地区のいいところ (有効回答62人※複数回答可)		
意見内容	意見数(全64件)	回答率
レンガの護岸が今も存在してすごい	23	36%
歴史が多く存在	9	14%
まちなかに祠がある	5	8%
細い路地が多い	3	5%
五十間鼻無縁仏堂では遺体を祀っている	2	3%
橋が多い	2	3%
羽田道が美原通りと繋がっている	2	3%
看板跡が残っている	2	3%
レンガの護岸より低い家があった	2	3%
その他	14	22%
合計	64	100%
質問2:望むまちの将来像(有効回答63人)		
意見内容	回答人数	回答率
海がきれいなまち	17	27%
広い公園があるまち	8	13%
歴史が残るまち	6	10%
きれいなまち	6	10%
賑やかなまち	5	8%
有名なまち	4	6%
レンガの護岸が残るまち	3	4%
お店が多いまち	3	4%
今のままのまち	3	4%
野球場があるまち	2	3%
平和なまち	2	3%
漁師が残るまち	1	2%
海水浴ができるまち	1	2%
自然が沢山あるまち	1	2%
無記入	1	2%
合計	63	100%

b). 将来像の変化—「質問2:将来の羽田のまち」に着目すると、海がきれいなまち(26.9%)や広い公園があるまち(13.7%)といったものをあげていた。前者は、本取り組みにおいては海に関する事象を教示する地点が多かったために、海に関する意見が多くあげられる結果となった。また、広い公園があるまちに関しては、本取り組みに先立って実施した事前アンケート同様の結果であったが、これも大森地区に平和の森公園といった広大な公園が存在したことから、この要望がより一層強化されたものとする。また、約8割の「羽小」児童が、地元地区に何かしらの具体的な地元地区の将来像を描いていた。この点につき、事前準備段階に行った事前アンケートにおいては、無回答や今のままのまちといった地元地区の将来に関心のみられなかった意見が大多数であった。このことを踏まえると、「羽小」児童は本取り組みを通じて、地元地区に関する具体的関心が高まったといえよう。

7. まとめ

本研究では、小学校児童の印象に残りやすい地域資源の特徴として、児童にとって身近な生活空間に関わる「物語性」とともに、海への畏怖の念や学校の前面が飛びこめる海だったことなどの「衝撃性(驚き)」の重要性を捉えた。したがって、単に事物の存在といった歴史的事実のみを伝えるだけでなく、上述したストーリー性を踏まえたまちあるきルートの構築が求められよう。

事前準備としての地元地区のまちあるきWSでは、児童が地元地区の地域特性を認識し始めたことから、事前準備の取り組みは児童が地元地区に関心を持つきっかけとなり、地区交流WSを行う上で有効であったといえる。また、地区交流WSでは、児童は地元地区の地域資源や日常生活に関わる遊び場などを他地区と比較する傾向を捉えた。さらに、他校の児童に指摘されたことで、改めて地元地区の地域特性を認識し、誇りを持つ機会になり本研究の意図する「気付き」の学習としての効果が得られた。加えて、児童同士の交流によって、相手の話を聞き、学習効果を高めたことは地区交流WSの大きな効果であるといえる。

8. 今後の展開

今回の取り組みにあたって、このWSプログラム以外にも「羽小」「大五小」のそれぞれにおいて、担任教諭が地元住民との交流によって事前に各地元のまちあるきを行うなど自発的な取り組みを行っていた。今後は、こうした自主的な取り組みや担任教諭から見た当WSプログラムの課題点や効果を明らかにし、都市臨海部の海辺まちづくり教育のあり方を導いていく所存である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、現地まちあるきやヒアリング調査でご協力頂いた羽田寿連合会羽田高齢者学級の幸田義一会長、大田区立羽田小学校の中村秀夫校長、望月伸司教諭、藤野千秋教諭ならびに大田区立大森第五小学校の五十嵐則也校長、藤田伸一教諭、神田麻衣子教諭の諸氏に深謝致します。

本研究成果の一部は平成23年度文科省科学研究費補助金(代表:早稲田大学教授・佐々木葉, 分担者:日本大学准教授・岡田智秀他)による

引用・参考文献

- 1) 国土交通省:「学校における景観まちづくり学習の手引き」, 国土交通省ホームページ, 2008
- 2) 国土交通省:「小学校における景観まちづくり学習実践事例集」, 国土交通省ホームページ, 2008
- 3) 福田朗大ほか2名:「海の利用の変遷から見た大田区臨海部のまちづくりに関する研究」, 土木学会第6回景観・デザイン研究発表会, 2010.12
- 4) 大田区: www.city.ota.tokyo.jp, 大田区ホームページ
- 5) 首代佑太ほか3名:「東京都大田区臨海部における海辺の景観まちづくり学習のあり方に関する研究(その1)」, 第55回日本大学理工学部学術講演会予稿集, pp.395~396, 2011.11
- 6) 関奈穂ほか3名:「東京都大田区臨海部における海辺の景観まちづくり学習のあり方に関する研究(その2)」, 第55回日本大学理工学部学術講演会予稿集, pp.397~398, 2011.11

A Study on the Ideal Way of Town Planning Education in Waterfront
-A case study of the elementary school at Ota of Tokyo-

Yuta SHUDAI, Norihisa YOKOUCHI, Tomohide OKADA, Naho SEKI